

第十一回

あなたにあいたくて

生まれてきた詩コンクール

—ことばはやさしく、こころはふかく—



令和二(二〇二〇)年度

作品集

第11回

「あなたにあいたくて生まれてきた詩」

コンクール

—ことばはやさしく、こころはふかく—

令和2(2020)年度

作品集

宗そう
左近さこん

(一九一九〜二〇〇六年)



北九州市戸畑区生まれ。本名は古賀照てらうち。詩人、評論家、仏文学者、翻訳家。東京大学哲学科卒業。詩集『炎える母』で歴程賞を受賞。晩年には『響灘』など一行詩の作品を発表。また古今東西を超えた美術評論を行い、著書に『日本の美 その夢と祈り』などがある。また翻訳ではエミール・ゾラ、モーパッサン、ロマン・ロラン、アガサ・クリステイの作品のほか、ロラン・バルト『表徴の帝国』なども手がけた。詩歌文学館賞、チカダ賞、北九州市民文化賞を受賞し、日本現代詩人会から「先達詩人」の顕彰を受けた。

この詩のコンクールは、北九州の生んだ詩人、宗左近さんとみずかみかずよさんの業績を記念して行われるものです。

「あなたにあいたくて生まれてきた詩」は、宗左近さんの編んだ詩集のタイトルから、「ことばはやさしく、こころはふかく」は、みずかみかずよさんのことばからいただきました。

みずかみかずよ

(一九三五〜一九八八年)



北九州市八幡東区生まれ。詩人、児童文学作家。

幼稚園勤務のかたわら、詩や童話を書き始める。その後、児童文学誌「小さい旗」に参加。その作品は、小学校の国語教科書にも採用され、また児童合唱曲にもなった。詩集「いのち」で第五回丸山豊記念現代詩賞を受賞。代表作に「馬でかければ」「ぎんのストロー」「ごめんねキュービー」など。北九州市民文化賞を受賞。

目次

目次

1

△小学生の部▽

宇宙	寺内 紗優	2
花火	河合 博輝	3
土の湖	井上 昊祐	4
見透かされる心	森 凜佳	5
あめ	蔵本 昂空	6
夏が来た	近藤 克海	7
たき火はあたたかい	廣田 夏	8
まどのをそをみてごらん	田中みさき	9
本当の笑顔	上田 和樹	10
せつちやくざい	林 和香	11
なつのにゆうがくしき	能美 にな	12
ぼくのゆめ	九郎田 奏	13
あったか	ターナー志絵菜	14
ほたる	金子 愛奈	15
波とぼく	クレアけんと	16

△中学生の部▽

時計 音 時間	江田 遥花	18
時間と私	岩本 静	19
自由	平田 永愛	20
桜	石原 優	21
航海	中田 愛梨	22
はじめまして	月峯 千聖	23
三ヶ月の休暇	今泉 杏彩	24
「もの」と「こと」	川上 大成	25
一つだけの世界	梶川 果鈴	26
コロナウイルスは変えた	上杉 愛菜	27
いつも通り？	弘友 伸子	28
アマガエル	小林 竜芽	29
初めて	福澤 凜音	30
柱	野寄 結衣	31
壁	澤井 紅里	32

講評

小学生の部 受賞作品	34
最終候補作品	36
中学生の部 受賞作品	37
最終候補作品	38
選考委員	39
	40

ごあいさつ

北九州市長 北橋 健治



「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールにおいて各賞を受賞された小学生、中学生の皆さん、そしてご家族の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

このコンクールは、本市出身の詩人 宗左近先生、みずかみかずよ先生を顕彰するとともに、子どもたちの豊かな想像力や表現力を伸ばし、未来の詩人や作家が誕生することを願い、平成22年度にスタートしました。

11回目を迎える今回は、コロナ禍での開催となりました。勉学や生活に様々な影響がある中にも関わらず、市内外から昨年を上回る1,332作品もの応募がありました。そのうち384作品は、京都府や岐阜県など県外からの応募であり、また、海外からも27作品の応募がありました。当コンクールが全国はもとより、海外にも広がりつつあることを大変嬉しく思います。

受賞された皆さんをはじめ、応募された小学生、中学生の皆さんには、これからも今だからこそ表現できる言葉で綴った作品を創作し続けていただくことを期待しています。

さて、現在本市では「東アジア文化都市北九州2020▼21」を開催しており、令和3年12月まで様々な文化事業を実施する予定です。これまで培ってきた文学的土壌を活かし、「文学の街・北九州」を全国に発信していきます。今後も適切な新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じながら、「東アジア文化都市」を盛り上げてまいりますので、皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

結びに、小学生、中学生の皆さんの今後ますますのご活躍をお祈りしますとともに、選考にあたりご尽力賜りました平出隆先生をはじめ、選考委員、関係の皆様にご厚く御礼申し上げます。

宇宙

京都教育大学附属京都小中学校 六年 寺内 紗優

詩を書いている時。

作文を書いている時。

何かを書く時

私の頭の中は宇宙になっている

頭という宇宙に

言葉という星が

無数に浮いている

そして

使いたい表現

考えが一つにまとまって

わく星となる

言葉に悩む

宇宙の中から

丁度いい星を探す

見つからない

あきらめよう

そう思った時

新しい星が誕生した

最優秀賞

宗 左 近 賞

最優秀賞

みずかみかすよ賞

花火

北九州市立西小倉小学校 五年 河合 博輝

ヒュー、ドン、パラパラパラ

たくさんの光のあとに音が鳴る

パラパラパラ

ぼくはあの花火の音が好き

ドン、ドンッ

おくれて響くあの花火の音が好き

響くのは音だけじゃなくて

花火のしん動

ぼくの胸の奥の奥に

おかれて届く

あの花火の音が好き

ぼくの心にいつまでも残る花火

土の湖

京都教育大学附属京都小中学校 六年 井上 昊祐

放課後

運動場にかけこんだら

しめった土が

水面みなものように光っていた

足をふみ出すたびに

光がまばゆく点滅する

太陽が

ぼくを見下ろして

さようなら

と声をかける

空を見上げたその時

虹色の光がぼくを包んだ

思わず目をふさぐ

目をあけると

いつもの運動場が広がっていた

空には

入道雲が広がっていた

優秀賞

北九州市教育長賞

見透かされる心

京都教育大学附属京都小中学校 六年 森

凜佳

ネコは私のことをじっと見ていた

私の心を見透かしたように

友達とけんかした

意地ばかりはって

「ごめん」

の一言も言えへん

ウチのバカ

なんでそんな簡単な事も できひんの

ウチなんかきらい

小さな小道に入ったとき

あるネコと出会った

その目は

私を見ていた

こわいぐらい じっと

あめ

北九州市立曾根小学校 一年 蔵本 昂空

ピタ、ピタ、ピタ。

あめがとまった。まったく。

ピタン、ピタン、ピタン。

そしてはながさいた。

ひらいた。

あめがとまった。

夏が来た

北九州市立曾根小学校 三年 近藤 克海

夏というものは、あつくて、お茶をたくさん

グビグビのんでスーとなるきせつである。

夏というものは、運動したくなくなつて

すずしい家の中でゴロゴロしたくなるのである。

夏というものは、ねる時も体力を使ってしまうものである。

夏というものは、ひまわりが元気になつて

さくきせつである。

夏というものは、プールに入って泳いだり、

うきわでプカプカうかんだりしたり、

バナナアイスがプールの後に食べたくなるきせつ。

だから、

そんな夏がぼくは、大すき。

たき火はあたたかい

和泉市立南池田小学校 二年 廣田 夏

かあちゃんととうちゃんと三人で

話ながら たき火

よふかしうれしい

たき火はあたたかい

たき火でイカをあぶってたべる

かまぼこはうらをむけてたべる

マシユマロはくるくるやいてたべる

たき火はあたたかい

ぼくがうちわであおぐと火りよくが高まる

赤くなる

うちわであおぐの大すき

たき火はあたたかい

まきは ぼくがおのでわった

まきは よくもえる

とくに 中がよくもえる

たき火はあたたかい

まっくらだからほしがきれいに見える

くもがなくてきれい

とうちゃんだけ ながれぼしを見た

うらやましい

たき火はあたたかい

おふとんかぶったらすすぐねたよ

明日もまたしたい

まどのそとをみてごらん

鹿児島三育小学校 四年 田中 みさき

まどのそと みてごらん

くもの形が あなたみたい

だんだんそれが ほほえんで

あなたみたいに あったかい

だってあなたがいるみたい

だって心にあなたがいるから

まどのそと あなたみたいに

やさしいおかお

あなたみたいに ほほえんだ

だって心にあなたがいるから

まどのそと につこりわらって きえてった

本当の笑顔

京都教育大学附属京都小中学校 六年 上田 和樹

本当の笑顔って何だろう。

人生には

笑わないといけない時も

あるのだろうか。

自分の中では、それは

本当の笑顔とは言わない。

では、どんなことだろう。

世界が平和に、不平等も無くなった

時に笑ったら本当の笑顔なのだろうか。

その日はいつ来るのか。

そもそも来ないかもしれないな。

だとしたら、どれが

本当の笑顔なのだろう。

考えても分からない。

気が付くと、友達がぼくのそばで、

笑いながら話していた。

せつちやくざい

京都教育大学附属京都小中学校 六年 林 和香

「ごめん…ごめんね」
そう言いたいだけなのに
口がせつちやくざいで
ひっつけられたみたい
開かなかった

目の前には
みけんにしわをよせて
うちがなげたボールが
あたってしまった
額をさわる友達

うちが
なげたボールは
バツチーンて
すごい音をたてて
友達に
あたってしまった

思い返すと
強くながってしまった
うちが悪い…
うちが悪いんだ

そう思った時
せつちやくざいが
やわらかくなつて
とけた…ような気がした

「さっきはあててごめん」
友達は ゆるしてくれた
「別に いいよ」

せつちやくざいが
二つの心をつなげてくれた

なつのにゆうがくしき

明治学園小学校 一年 能美 にな

さくらのかわりに さいていた

あじさいきれいに さいていた

ひらひらちようちよの かわりには

みんなせみが ないていた

ろくねん じしゅくの せみたちは

なにおもって いたのだろう

これから ろくねん わたしたち

なにおもって いくのだろう

ぼくのゆめ

北九州市立井堀小学校 二年 九郎田 奏

ぼくはけしごむ。

えんぴつより、つかってほしい

まちどおしいなー。

そろそろつかってくれてもいいのに

なんでかな。

ぼくのゆめは、つかってもらう

ことにしよう

あったか

北九州市立井堀小学校 二年 ターナー 志絵菜

どんぐりさん、あったかくて

つるつるだね。

ありがとう。おもちゃにされて

しまうのかと思ってたよ。

おもちゃにされず、ポケットに

入れてくれたから 助かったよ。

これから、いっしょにしようね

あったかいから、もっておこう

このどんぐりのぼうしが、きれいだなあ

あったか。

ほたる

福岡教育大学附属小倉小学校 二年 金子 愛奈

まっくらな道 ちよっとこわくて
お父さんにしがみついて歩いた

ザーザーゴーゴー川の音
グワツグワー グワツグワー かえるの声

今年はいないね
きよねんはいっぱいとんでたのにな

と、
ほそながいはっぱの上に

じーっといつびき
ほわあん ふっ ほわあん ふっ
ついたりきえたり ついたりきえたり

ぼくは ここだよ
だれかを まっているみたい

と、
川のむこうから こっちにむかって

つーっといっびき
ほわあん ふっ ほわあん ふっ
ついたりきえたり ついたりきえたり

どこななの？ どこななの？
だれかをさがしているみたい

と、
はっぱの上から ふわっ

いちど ぶつかりそうになって
ほわあん ほわあん ふっ ふっ
ついたりついたり きえたりきえたり

リズムをあわせて
ほわあん ふっ ほわあん ふっ

やっと会えたね ほわあん ふっ
さがしてたんだよ ほわあん ふっ
いっしょになつて ほわあん ふっ

そのまあいっしょに まいあがつて
おそらに ふっ
見えなくなった

ケロケロ ケロケロ かえるの 声
サラサラ シャラ シャラー 川の音

やっと会えたんだね
よかったね

お父さんと手をつないで帰った
まっくらな道 ほしを見ながら

波とぼく

日仏文化学院パリ日本人学校 六年 クレア けんと

波がザブーンと打ち寄せる

時にはおだやかに

時にははげしく

波ができるのは

風がふくから

そして 地球が回っているから

波がザブーンと打ち寄せる

時には低く

時には高く

波の高さが変わるのは

地球と月が動いているから

そして地球と月が引っ張り合っているから

波がザブーンと打ち寄せるのは

何十億年も時の力 自然の力

ぼくはただじっと

寄せる波を見続けている

時計音時間

北九州市立霧丘中学校 二年 江田 遥花

あの子が遊んでいる時も
あなたが眠っている時も
誰が何をしても

私は止まることなく走り続けます

速度を変えることなく

一定のリズムを保って

心地良い音を響かせながら

永遠に変わらないものが

ここにあると伝えるように

ただただ未来に向かって走って行きます

自分以外のことも考えながら過ごしても

嫌がられるようなことしながら過ごしても

感謝されるようなことしながら過ごしても
同じ時が流れているのなら

今しかできないことをしようじゃないか

いつか今を振り返った時

ああ良い時間だった 充実していたと
笑えるように

あなたが遊んでいる時も

あの子が眠っている時も

誰が何をしても

私は止まることなく走り続けます

速度を変えることなく

一定のリズムを保って

心地良い音を響かせながら

永遠に変わらないものが

ここにあると伝えるように

ただただ未来に向かって走って行きます

どこかで一人耳を澄ましてみて下さい
いつもは聞こえない

今だからこそ聞こえる音が

聞こえてくるはずです

最優秀賞

宗左近賞

みずかみかずよ賞

時間と私

北九州市立霧丘中学校 三年 岩本 静

めくる
何度も読んだ本をめくる
新しく読む本をめくる
めくる
何度も使った教科書をめくる
新しく届いた教科書をめくる
めくる
昨日届いた新聞をめくる
今日届いた新聞をめくる
めくる
カレンダーをめくる
次から次へ 日が過ぎていくごとに
何度も何度もめくり続ける
昨日のカレンダーをめくることはない
カレンダーは未来にしか進まない
回る
オルゴールのネジが回る
曲が止まったらネジも止まる
回る
CDが回る
音楽を聞き終わったらCDも止まる
回る
せんぷうきが回る
夏が終わったら止まる
回る
風車が回る
風がやんだら止まる
回る
時計の針が回る
何があっても止まらない
永遠と時間が進む限り回り続ける
時計も未来にしか進まない
どんなことがあっても
悲しくて
楽しくても
時間は永遠に止まらない
私の身長も伸びていく
制限できない時間のよう

自由

沖縄県糸満市立三和中学校 二年 平田 永愛

あの柵をこえて
あの階段をのぼって
あの扉をひらいたら
そこに自由が
広がっているのだろうか。

たぶんちがうのだろう。
たぶんそこに広がっているのは屋上で
わたしは ただ ただ
後悔におそわれるのだろう

この窓をこえて
この囲いにのぼって
この三階からとびおりたら
そこから自由が
はじまるのだろうか。

たぶんちがうのだろう。
たぶんそこからはじまるのは地獄で
わたしは ただただ
見知らぬ人に片づけられるのだろう。

空を飛ぶ鳥になったら私は自由か。
堂々としたライオンになったら私は自由か。
ゆうゆうと泳ぐ魚になったら私は自由か。

自由を求めるわたしは自由か。
自由に見えるあなたは孤独か。

どこに自由が広がっているのだろう。
どこから自由がはじまるのだろう。
どこから孤独ははじまって、
どこから孤独が広がるのだろう。

もう一度、問う。
わたしは自由か。

桜

北九州市立霧丘中学校 三年 石原 優

春の訪れ

山が桜色に染まり始める
桜が咲くとみんな見上げたくなる
桜が咲くとみんな近くに集まりたくなる
そしてみんな笑顔になる
でも今は

それが叶わない
桜がこんなに遠いものになるなんて
あたりまえのことがあたりまえでなくなる
なんて

去年の今頃はどうしてただらう
別れや出会い、悲しみや喜び
様々な感情を抱きながら、前へ前へと進んでいた
何も疑いもせずに

春の終わり

山から桜色がどんどん消えてゆく
誰にも見られないまま、美しく舞い散っていたのだろうか
花びらはきつと地面で茶色に変わっている
だろう

まるで今の私のようにだと寂しくなる
一人で過ごす日々

窓を開けてみる

風が髪を乱す

「桜なら来年もまた咲くよ」

そう言われた気がした
桜は散ってしまったけれど、すぐに緑色の新芽が
出て次に花咲く準備をし始める
みんなが見向きもしなくなっても
暑くても寒くても

花咲く日を目指して
静かにそこに立ち続ける

私も右往左往するのはやめよう

時には苦しくなる時も

逃げたくなる時もあるだろう

でもそんな時はまた窓を開けて桜を思う

私はここにいて

自分の信じる道を一步一步歩いていけばいい

航海

北九州市立霧丘中学校 三年 中田 愛梨

すべては変わり続ける
すべてはいつか終わる
すべては不完全である

始まりがあれば終わりがある
その時期は誰にも分からない
だが その時期を変化させることはできる
どんな方向にも
変えるべき方向は分かっている
地球という大きな船がどこに辿り着くのか
進路を決めるのは
私たちの行動である

今とどれだけ向き合えるか
その人数が 道を切り開く鍵となる
想像力の扉を開けることができたとき
船には何人乗っているだろう

明日の保証がない航海
今 私たちは生きている

すべては永久不変でないように
この状況にも終わりが来る

航海で得た教訓を
後世に伝え 残すことは
未来への財産になるはずだ

はじめまして

北九州市立霧丘中学校 一年 月峯 千聖

はじめまして
 ぼくはひよこ
 からをわったら
 なまえをくれた
 ぼくはびよまる

はじめまして
 わたしはのうさぎ
 つちのうえもいけれど
 ここもまあまあ
 わるくはないわね

はじめまして
 わたしはのらねこ
 いつもぼかぼかして
 わたしはここが
 だあいすき

はじめまして
 おれはじんべいぎめ
 ゆめにもでてきた
 いつかのうみを
 おもいだす

はじめまして
 ぼくらはピエロ
 たいへんだった
 れんしゅうのせい
 かみておけよ

はじめまして
 ぼくはカエル
 さいしょはしかく
 だったけど
 いまはカエル

はじめまして
 わたしはつくえ
 いろんなひとが
 すんでいる
 そしてわたしは
 かんりにん

はじめまして
 わたしはにんげん
 いろんなひとに
 いやされて
 なんとかきょうも
 たのしいいちにち

三ヶ月の休暇

北九州市立霧丘中学校 一年 今泉 杏彩

図書館は閉まっていて
新しい本を借りることが出来ない
水族館も閉まっていて
ペンギンの泳ぐ姿も見ることが出来ない
ほとんど一日家の中で
夏休みより長い時間
母と二人だった

昼ご飯に時々
スクランブルエッグを作った
小学校の家庭科で習った
思い出のメニュー
授業を思い浮かべながら
作ってみた
始めのうちは
卵を割ったらボウルにカラが入った
火を通しすぎて
固くなっていた
だんだん
ふんわり半熟に
作れるようになった
テレビで観た
炭酸水を入れる工夫をしてみたら
美味しく出来た

友達は
どんな昼ご飯を
食べているのかな

とうとう
先生には会えなかったけれど
近所のさくらの木の下で
まだ着なれない制服を着て
写真をとった

ひらひらと舞う花びらを
つかまえようと追いかけたが
とらえることは出来なかった

ピンク色の花びらが
緑の葉になり
窓の外でジギタリスの
白いベルのような花が揺れている

教科書に名前を
まだ記入していなかった

「もの」と「こと」

北九州市立霧丘中学校 二年 川上 大成

雨と飴
降ってくるのと食べるもの

橋と箸
つなげるものとかむもの

川と皮
流れるものとかぶさるもの

紙と神
書き残すものと祈るもの

岐路と帰路
わかれた道と帰る道

石と意志
地球の欠片と強い気持ち

ひとつの「もの」はそれぞれの
大事な「いみ」を持っている

菓子のふた
食べれるように保つため

警察官
世界の秩序を守るため

髪や皮膚
自分の体を守るため

本を読む
豊かな心をつくるため

法と律
平和な国に変えるため

言葉と文字
自分の気持ちを伝えるため

ひとつの「こと」はそれぞれの
大事な「りゆう」を背負っている

一つだけの世界

北九州市立霧丘中学校 二年 梶川 果鈴

一人だけの部屋に 一人だけの私が

一つだけの窓を開け 一つだけの太陽を

一人だけしかない部屋へと 招き入れる

おはようと一言だけ交わして

一杯だけの水を飲み 一切れだけのパンと

一個だけのリングで 朝食を終える

一つだけの世界へと飛び出すと

一冊の本に 一つのおはながあって

一輪の花に止まる 一匹の蝶がいて

一人に 一つだけの個性が輝いて

一つだけの世界に 一つの生命いのちが生まれる

一つだけだから 見つけることが出来て

一つだけの世界だから 小さな幸せに気付くことが出来る

その「ひとつだけ」が かけがえのない

小さな幸せに繋がるはずだから

私は 一つだけで満足出来るような

そんな 人間になりたい

コロナウイルスは変えた

北九州市立霧丘中学校 三年 上杉 愛菜

私達の世界は突然に変わった
学校へ行けない
友達に会えない
家の外へ出られない
世界中が恐怖に陥り
街にも人の姿はほとんど見えない
コロナウイルスは生活を変えた

私達の世界は突然に変わった
マスクがどこにも売っていない
人々はマスクを追い求めてさまよった
持っているマスクをくり返し使った
それほどまでにマスク不足になった
マスクを着ける時なんて
風邪をひいた時か
給食当番の時くらいだったのに
コロナウイルスはマスクへの認識を変えた

私達の世界は突然に変わった
営業している店がほとんどなくなった
店を開けないからお金が入ってこない
経済が回らなくなってしまう
社員に払える給料がないから
つぶれてしまった会社もある
明日食べるものに困って
生活が苦しくなってしまう人もいる
コロナウイルスは社会を変えた

私達の世界は突然に変わった
外で少し咳やくしゃみをしただけで
睨まれてしまう
時には怒鳴られてしまうニュースも
見たことがある
温厚な人間達はどこへ行ってしまったのか
みんなウイルスへの恐怖で
おかしくなっているのかもしれない
コロナウイルスは人間を変えた

私達の世界は突然に変わった
次々と感染者が急増していく
自分がいつ感染してもおかしくない
少し前までは漫画が欲しいとか
思っていたけれど
今はただ普通に暮らしたい
世界中の人々が
思っていることは一つ

「早く日常に戻りたい」
コロナウイルスは人々の願いを変えた

いつも通り？

北九州市立門司総合特別支援学校 三年 弘友 伸子

いつも通り？

ごろごろ

にこにこ

ケタケタ

めらめら

にこにこ

いつも通り

いつも通り？

いそいそ

バタバタ

にこにこ

めらめら

ケタケタ

いつも通り だったなあ

いつも通り

それは 幸せなこと？

いつも通り

それは 退屈なこと？

いつも通り

それは

幸せなこと

盛りだくさんなこと

とても すてきなこと だなあ

いつも通り？

アマガエル

北九州市立白銀中学校 一年 小林 竜芽

ちいさいからだ ながいした
くりくりしため ちいさいて
ぬめぬめからだ かべにつく
ケロケロとなく なきごえは
とてもきれいで いやされる
さいきんみない アマガエル
およぎがはやく きんメダル
からだのいろは いろいろで
いろとりどりの カエルたち
ぶにぶにしている そのからだ
はねまわるその きんにくは
りくじょうせんしゅも まっさおだ
きらいなひとも おおいけど
じつはとっても かわいいよ
においはとても なまぐさい
そこがとっても いいんだよ
なつのよなかに なきとおす
さいきんない アマガエル

初めて

北九州市立白銀中学校 二年 福澤 凜音

初めて

こんな感覚 初めて

真っ赤に染まった空の下での帰り道

ところが躍るような感覚 初めて

友達皆で笑いあえるこの空間 初めて

ああ こんなにも嬉しいんだ

初めて

こんな気持ち 初めて

自分の生まれた日に大切な人皆でお祝い

嬉しくて涙が溢れるような気持ち 初めて

友達や家族と喧嘩 初めて

心がしめつけられるよう

ああ こんなにも大切なんだ

初めて

こんな自分 初めて

何も知らずに人を傷つけた

相手も自分も泣かせた

こんな自分は 初めて

誰かを想って体が動いた 初めて

「ありがとう」と言われた

ああ こんなにも幸せだったんだ

初めて

全部全部初めて

こんなにもまだ知らない初めてが

いつも どこかで私を呼んでいる

どこにあるか分からない

私だけの「初めて」に会いに行こう

柱

北九州市立白銀中学校 二年 野寄 結衣

家には柱がある
家を支えるために柱がある

朝顔を支える柱がある
朝顔が姿勢をよくするために柱がある

電気を配る柱がある
みんなの生活を支えるために柱がある

木は柱だ
大きな柱が分かれて、分かれて
枝分かれして
たくさんさんの葉を支えている

道は柱だ
自分が行くべき場所まで足を支える
大勢の人を、車を
しっかり支えている

食べ物は柱だ
私たちが動くエネルギーを
体に届けてくれる
一人一人を支えている

足は柱だ
どれだけしんどくても
自分の体を支えてくれる

心は柱のようだ
自分の気持ち、考えを、
強くもった柱
言葉という地震で傷付けられても
また前に進むことを支えてくれる

心の柱が集まって
社会はみんながいる
おおきな家だ

壁

明治学園中学校 二年 澤井 紅里

僕はにぎやかな町の壁だった
長い間ここにいて
平凡な毎日を送っていたのに
急に 本当に急だった

あの夏の日
一瞬で焼け焦げて
僕に誰かが焼けついた
さっきまで本を読んでいたあの子が
一瞬で影になってしまった
熱い光をあびて

見渡す限り
ほとんど平らになってしまった町に僕は
一つぼつんと立ちつくした

数日後
突然誰かが僕に寄りかかり座った
その人は泣いていた
人の名前を呼びながら
何十年経っても 何百年経っても
二度と戦争をしてはいけないと思う
悩んで苦しんでいる人達が僕の前を通るのを
僕は嫌というほどみていたから

僕は記念館の中から君に叫ぶ
影になってしまった子供と共に

平 出 隆

中学校の部の宗左近賞は、江田遙花さんの「時計 音 時間」という詩です。第一連と第三連は、時計が語っているのでしょう。第二連と最後の連は、どうも時計の声ではないようです。そして読む人、または友だちに呼びかけているような調子です。微妙な切り替えを交互に行なうことによって、作者は時間の神秘的な正体を捕まえようとしています。よく考えられた、丁寧で高度なつくりといえるでしょう。

みずかみかずよ賞の岩本静さん「時間と私」も、時間がテーマです。「めくる」という一つの動詞を本、教科書、新聞、カレンダーにあてていきます。「回る」という動詞はオルゴールのネジ、CD、扇風機、風車、時計の針にあてられます。制限できないまま未来へ進む時間を、最後には伸びていく「私の身長」にみるところはみごとです。

今年の詩は新型コロナウイルスの禍いの中で書かれたもので、多くの詩は、つらい「時間」の中で見つめた出来事が書かれていました。その分、平穏な日常にないたくさんの発見がありました。賞に選ばれた詩は、つらい中でもしっかりと自分と外部を見つめることができています。時間、自由、変化など、抽象的な事柄をも見つめはじめています。

小学校の部の宗左近賞は、寺内紗優さんの「宇宙」です。「何かを書き時」の自分の頭の中をとらえていて、しかも「書く時」の状態そのものを詩のテーマとして書いている。普段からきつと、書くことの面白さを味わい、書くとはどういうことなのかを考えながら書いているのでしよう。

宇宙と星との関係は、自分の頭の中と、選ばれる前のたくさんの言葉との関係にひとしい、というわけです。すると、表現のまとまったものは、宇宙の惑星にあたるはず、というわけです。最後のところ、なかなかよい表現が見つからないと諦めようとしたところで見つけた言葉、それを新しい星の誕生に見立てました。この詩もそうやって、新しい星として誕生したのです。

みずかみかずよ賞は河合博輝君の「花火」。これは花火の光と音とを分けて、「音が好き」といいいます。「ぼく」はそれだけではなくて、「しん動」も好きなのです。光、音、振動、という三つのものが、一つずつ「おかれて届く」、だから「胸の奥の奥に」まで届くのでしょうか。

とてもシンプルな詩なのですが、深く「花火」を体験しているといえますね。「おかれて届く」という観察がとてもいい。いい詩は音が響きます。次の四つの「お」の音の響きは、読む人の胸の奥に届きます。「ぼくの胸の奥の奥に／おかれて届く／あの花火の音が好き」



© Takashi Mochizuki / ©望月 孝

平出 隆

北九州市門司区生まれ。
詩人・作家・多摩美術大学芸術学科教授。装幀家、

造本家としても知られる。

一橋大学在学中より詩と詩論を発表しデビュー。1974年に仲間とともに版元・書紀書林を構え、翌年、詩誌「書紀」を発刊。70年代の詩的ラディカリズムの先端を担う活動を展開。詩集『胡桃の戦意のために』で芸術選奨文部大臣新人賞、散文作品集『左手日記例言』で読売文学賞、散文集『ベルリンの瞬間』で紀行文学大賞、評伝『伊良子清白』で芸術選奨文部大臣賞、藤村記念歷程賞など受賞多数。また木山捷平文学賞を受賞した小説『猫の客』が2014年、世界的ベストセラーとなった。

小学生の部

受賞作品

最優秀賞

宗 左 近 賞 宇 宙

寺 内 紗 優

京都教育大学附属
京都小中学校 六年

最優秀賞

みずかみかずよ賞

花 火

河 合 博 輝

北九州市立
西小倉小学校 五年

優秀賞

北九州市市長賞

土 の 湖

井 上 昊 祐

京都教育大学附属
京都小中学校 六年

優秀賞

北九州市教育長賞

見透かされる心

森 凛 佳

京都教育大学附属
京都小中学校 六年

優秀賞

北九州市文学館長賞

あめ

蔵 本 昂 空

北九州市立
曾根小学校 一年

佳

作 夏が来た

近 藤 克 海

北九州市立
曾根小学校 三年

たき火はあたたかい

廣 田 夏

和泉市立
南池田小学校 二年

まどのそとをみてごらん

田 中 み さ ぎ

鹿児島三育小学校 四年

本当の笑顔

上 田 和 樹

京都教育大学附属
京都小中学校 六年

せつちやくざい

林 和 香

京都教育大学附属
京都小中学校 六年

なつのにゆうがくしき

能 美 に な

明治学園小学校 一年

ぼくのゆめ

九 郎 田 奏

北九州市立
井堀小学校 二年

あつたか

ターナー 志 絵 菜

北九州市立
井堀小学校 二年

ほたる

金 子 愛 奈

福岡教育大学附属
小倉小学校 二年

波とぼく

クレア けん と

日仏文化学院パリ
日本人学校 六年

学校団体賞

北九州市立 井堀小学校・日仏文化学院パリ日本人学校

最終候補作品

今日	斎藤 里衣紗	北九州市立 曾根小学校	一年
きたかせとはるかぜのふたご	野田 愛桜	北九州市立 花尾小学校	五年
しろい宿題	風早 柚里	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
だれが	木村 太河	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
ぼくは0.5倍速	古杉 咲萬	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
鏡の前の変顔大会	小森 考隼	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
思い出	小山 浩平	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
やっとわかったよ	堤 咲稀	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
両親つてりふじんや	松岡 賢吾	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
一筋の光	八木 鴻介	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
じまんの母	吉田 奈央	京都教育大学附属 京都小中学校	六年
ぼくからのメッセージ	小田 孝太郎	北九州市立 足立小学校	五年
まるいどんぐり	柳北 えみり	北九州市立 井堀小学校	二年
おくらないおくりもの	白井 こはる	ICA国際小学校	四年
あめ	和田 香織里	厚木市立 玉川小学校	三年
フランスの熱波	仙道 柊太	日仏文化学院バリー 日本人学校	四年
海水浴	村山 和成	日仏文化学院バリー 日本人学校	四年
彼岸花	藤澤 英璃	日仏文化学院バリー 日本人学校	六年

小学生の部 応募総数152点

中学生の部

受賞作品

最優秀賞	時計音時間	江田遥花	北九州市立霧丘中学校 二年
宗左近賞	時間と私	岩本静	北九州市立霧丘中学校 三年
最優秀賞 みずかみかずよ賞	自由	平田永愛	北九州市立三和中学校 二年 沖縄県糸満市立
優秀賞	桜	石原優	北九州市立霧丘中学校 三年
北九州市教育長賞	航海	中田愛梨	北九州市立霧丘中学校 三年
優秀賞 北九州市文学館長賞	はじめまして	月峯千聖	北九州市立霧丘中学校 一年
佳作	三ヶ月の休暇	今泉杏彩	北九州市立霧丘中学校 一年
	「もの」と「こと」	川上大成	北九州市立霧丘中学校 二年
	一つだけの世界	梶川果鈴	北九州市立霧丘中学校 二年
	コロナウイルスは変えた	上杉愛菜	北九州市立霧丘中学校 三年
	いつも通り?	弘友伸子	北九州市立門司総合特別支援学校 三年
	アマガエル	小林竜芽	北九州市立白銀中学校 一年
	初めて	福澤凜音	北九州市立白銀中学校 二年
	柱	野寄結衣	北九州市立白銀中学校 二年
	壁	澤井紅里	明治学園中学校 二年

学校団体賞

北九州市立霧丘中学校・指宿市立南指宿中学校

最終候補作品

風	小澤 怜奈	北九州市立霧丘中学校	一年
迷惑	道上 瑠人	北九州市立霧丘中学校	一年
自転車散歩	柳本 稜太	北九州市立霧丘中学校	一年
卒業式	中園 叶聖	北九州市立霧丘中学校	一年
早く学校に行きたい	神代 大喜	北九州市立霧丘中学校	一年
あこがれの中学校	福嶋 泰誠	北九州市立霧丘中学校	一年
休校中のキラキラな出来事	西田 優依	北九州市立霧丘中学校	二年
空気という楽しさ	森 隆乃介	北九州市立霧丘中学校	二年
弟	入學 虎之介	北九州市立霧丘中学校	二年
自由になりたい	甲斐田 彩芽	北九州市立霧丘中学校	二年
友達と	安西 美悠	北九州市立霧丘中学校	三年
かけがえのない日常	北村 瑚遥	北九州市立霧丘中学校	三年
釣り	山本 海音	北九州市立大谷中学校	二年
走れ	松下 美南	北九州市立大谷中学校	二年
青を私は知っている	廣森 美空	指宿市立南指宿中学校	二年
私の人生	藏永 緋衣子	北九州市立中原中学校	一年
新世界	岡田 理希	神戸市立星陵台中学校	三年
……かな	山下 真平	北九州市立白銀中学校	二年
家電生活	荻本 康人	北九州市立熊西中学校	一年

中学生の部 応募総数1180点

選考委員

最終選考委員

平出 隆

二次選考委員

鷹取美保子

大川内夏樹

岩下 祥子

北谷 真司

城戸 祥次

一次選考委員

鷹取美保子

大川内夏樹

岩下 祥子

第十一回

「あなたにあいたくて
生まれてきた詩」
コンクール

—こころはちやこころ、こころはふか—

令和二年度

作品集

二〇二二年一月二十二日発行

編集・発行

北九州市立文学館

〒八〇三・一〇八・三三

北九州市小倉北区城内四番一号

TEL 〇九三・一五七・一一五〇五

FAX 〇九三・一五七・一一五二三

印刷・製本 (有)青雲印刷

※本書掲載の記事及び写真の
無断転載・複製を禁じます。



Kitakyushu
Literature Museum